

氷見市久津呂の菊咲き桜について

中川 定一
氷見市立十二町小学校

氷見市上久津呂の八幡宮の旧境内に残されている桜が、ヤマザクラ系の1品種ノトキクザクラに近縁の新品種である可能性が高いことが判明したので報告する(図1)。

上久津呂の村社「八幡宮」は、文成3年(1892年)に現在の民家近くの小高い台地に移されたもので、問題の桜は、集落の南西1kmの山際(上久津呂字旧宮)の旧境内の跡に椿とともに残されている。「上久津呂八幡宮明細書」によれば、この桜は、明治5年(1872年)に神木とされているが、植栽されたものかどうかは不明である。

1993年4月、元金沢大学薬学部助教授木村久吉先生の調べによって、この桜は、能登半島によくあるヤマザクラ系の菊咲きの一品种(図2,3)であることが分かった。さらに、総花柄の太いことや、がく片が三角形の外片と狭長だ円形または倒卵状狭だ円形の内片を有する特徴があることから新品種として認めてもよいとのことであった。最も近縁な品種は、ノトキクザクラの一品种、ライ

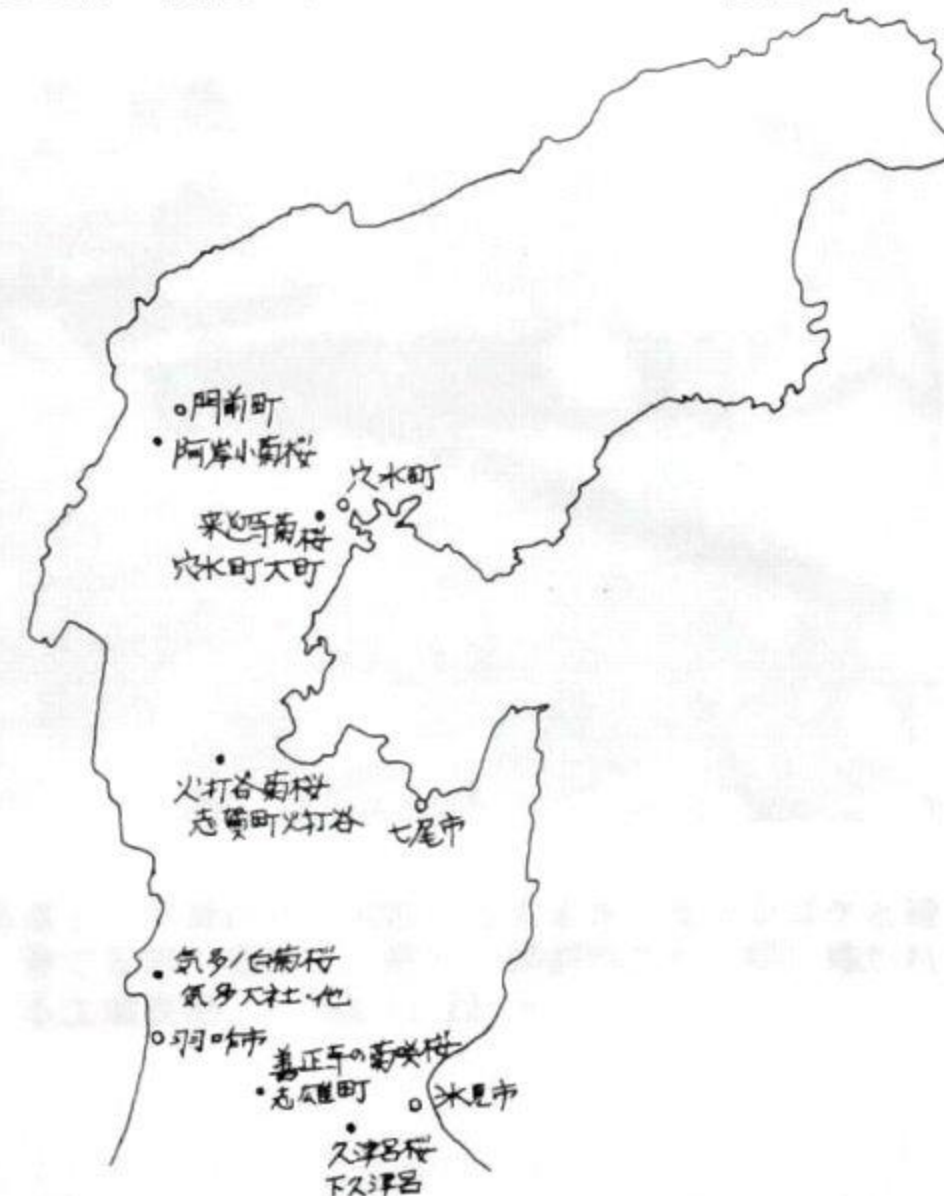


図1. 能登のヤマザクラ系キクザクラの分布地図

コウジキクザクラ(来迎寺菊桜=穴水町)である。今後、近縁品種間での比較を行う必要がある。



図2. ノトキクザクラに近縁の新品種(氷見市上久津呂八幡宮旧境内)

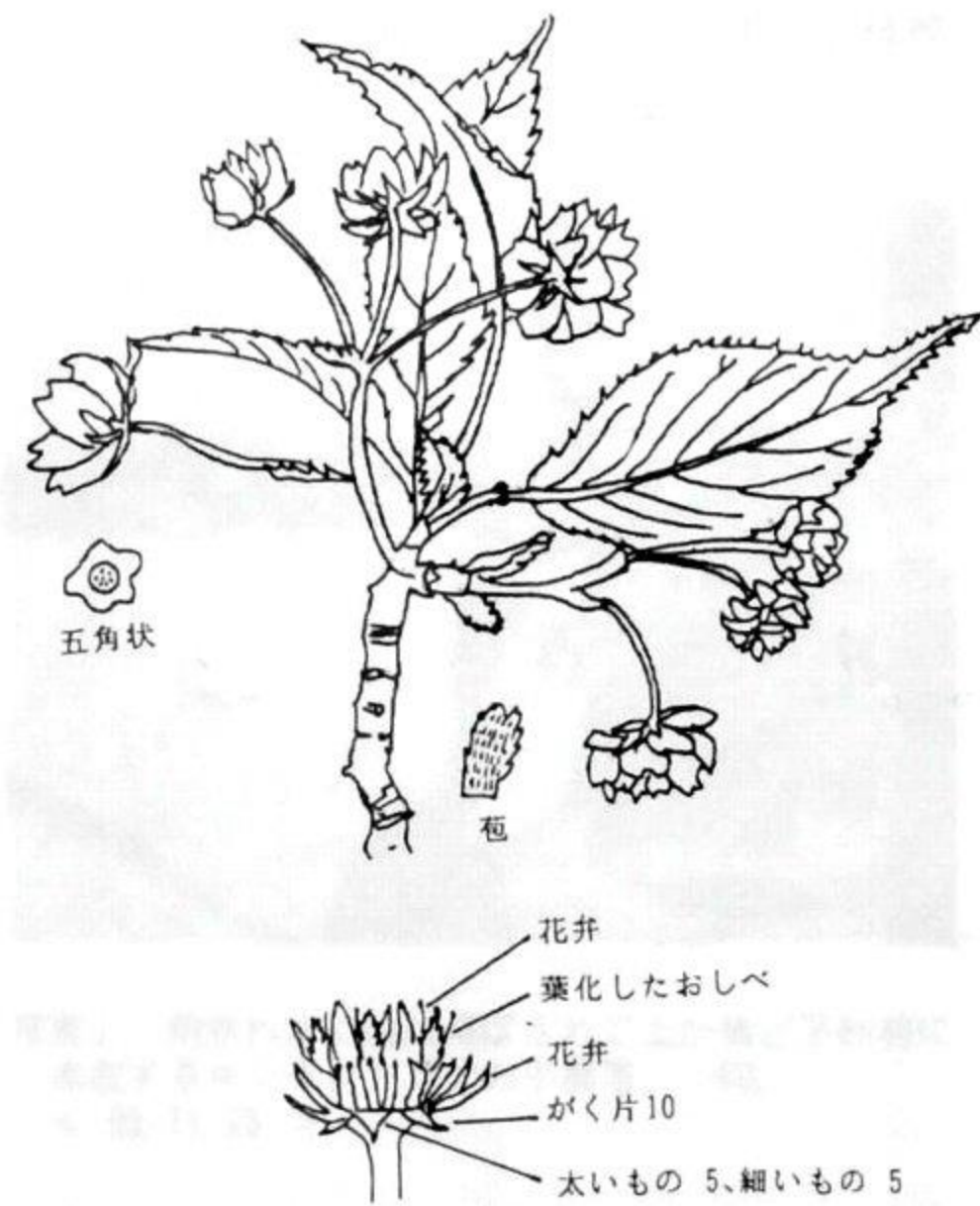


図3. ノトキクザクラに近縁の新品種(図2のものをスケッチしたもの)

富山湾における サラサベッコウタマガイの記録

高山 茂樹
魚津水族館

A Record of *Onchidiopsis nihonkaiensis* OKUTANI & NUMANAMI collected from Toyama Bay.
Shigeki Takayama

OKUTANI & NUMANAMI(1993)は佐渡島、両津湾の水深400~500mのえび籠漁場で採集された大型のベッコウタマガイの一種を新種、サラサベッコウタマガイ *Onchidiopsis nihonkaiensis* OKUTANI & NUMANAMI, 1993として記載した。本種はベッコウタマガイ類としては大型、軟体部は寒天質で生息深度が大きい特徴がある。模式産地の両津湾以外では報告されていない。

1992年に富山県黒部川沖水深300~400mで捕獲された不明種が本種と判明したので、新産地として報告する。本稿作成にあたり、標本を提供された魚住義彦氏及び、第3達丸乗組員の皆様に深く感謝します。

新産地 富山県黒部川沖水深300~400m

1992年5月30日1個体捕獲

ホッコクアカエビ、ノログンゲの底引網に混獲

体長 約10cm

原記載(OKUTANI & NUMANAMI, 1993)では、背面は暗灰色の地に白斑を散らし、白斑の中央が黄緑色である。入手した個体は背面が暗灰色の地に白斑を散らしているが、白斑の中央には黄色の斑点が1~4個連なってあった(Fig.1)。模式産地の両津湾水深400~500mでは比較的普通に採集される(OKUTANI & NUMANAMI, 1993)。黒部川沖では採集例が1例のみで、生息数は少ないと思われる。かつて、富山県下新川郡朝日町赤川沖水深300m付近のアカガレイ底刺網で、損傷の激しい類似の種が捕獲されているが、近年、捕獲されず、種の確認はされていない。

本個体は捕獲、輸送後、直ちに水温2~4℃、水量約1tの水槽で飼育した。底質は粗砂。同一水槽内にはザラビクニンやアゴゲンゲ、クロゲンゲ、ボウズイカ、オオエッチュウバイが飼育されていた。餌はホッコクアカエビのむき身やオキアミ、サバやマイワシなど魚肉を与えたが摂餌は見られなかった。また、水槽の他の生物に襲われる事はなかった。しかし、時々水槽内の魚類に仰向けにされる事があったが、その時、足を収縮する事はなかった。砂の上でじっとしていることが多く、時々移動した。稀に垂直な水槽の亚克力面を登ることがあった(Fig.2)。本個体は約6ヶ月の飼育後、水槽のオーバーフローに吸い込まれて死亡した。

参考文献

OKUTANI, T and NUMANAMI, H. 1993. An unusual lamelliariid gastropod from bathyal depth in the Sea of Japan. *Jap. Jour. Malac.*, 52 (3), 211-215.

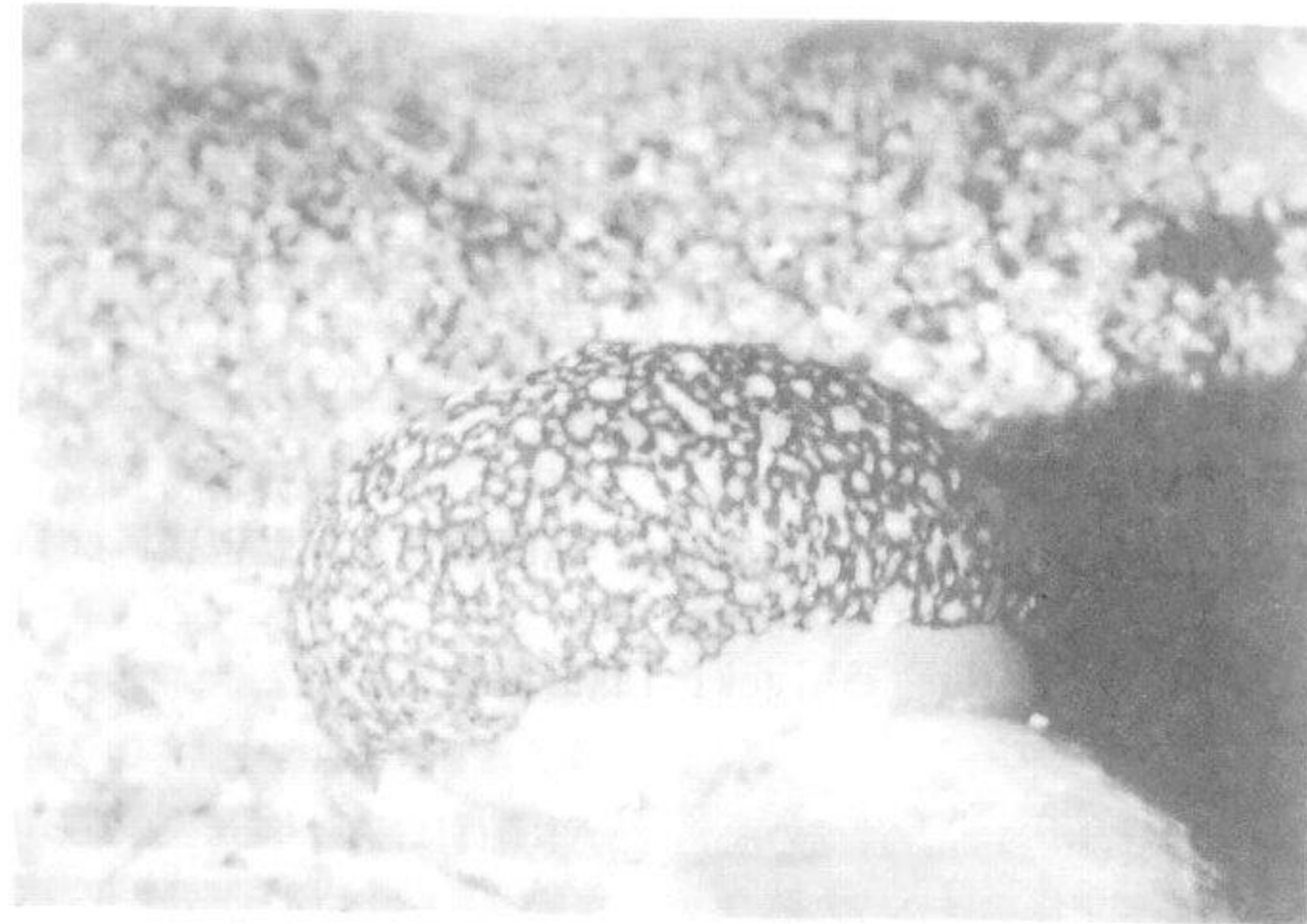


図1. 水槽内で飼育中のサラサベッコウタマガイ。(前部より見る)。
Living animal in the aqualium; anterior view.



図2. 水槽前面を登るサラサベッコウタマガイ。(腹面より見る)。
Living animal in the aqualium; ventral view.

田中忠次さんのご逝去を悼む

本多啓七

最近まで元気で活躍しておられた田中忠次さんが急に亡くなるとは、本当に夢のようで誠に哀惜の情にたえない。

本人が去る9月30日の富山県環境保全審議会に出席された際、現在、病院で検査中なので医師に特別許可を貰って来たと言っておられた。さらに11月4日には、まだ入院中と聞いて、早速お見舞いした。その時にはまだ元気であって、早く全快して下さいと、いろいろと語り合って別れたのに、3日後の11月7日にあの世に行かれるとは。あんな頑健な身体を持主であったのに、余りの人生の脆さに、ただ驚き、悲嘆の涙にくれている。

彼は魚津中学校時代からの大切な親友で、富山師範学校卒業以来、共に野外観察が好きで、自然についてよく語り、互いに自然を楽しんできた。また、不思議な因縁で、富山県の文化財審議、環境保全、あるいは自然保護関係などの会合で席を同じくしてきた。さらに、富山県生物学会、日本黒部学会、くろべ植物友の会などでは大変お世話になったが、何時も役職を快く引受け、それぞれの会の発展に、情熱を傾けて努力して下さったことに対し、深く感謝申し上げて止まないものがある。

田中忠次さんは何ととっても富山県昆虫界の第一任者であり、斯界の確立を計られた功績は甚大で、しかも中央の昆虫学会においても富山県が存在が注目されたことは、富山県生物学会の誇りであった。さらに、日本は勿論、海外にも羽ばたく足がかりとなることを念じておられたことと思われる。

田中忠次さんはこの世で優れた業績を挙げ、名声を残された。その反面、81才の高齢者として、過去を振り返り邯鄲一炊の夢の感があったことも考えられてならない。

この素晴らしい業績を物語るものとして、彼の胸に勲五等双葉旭日章の叙勲が輝いている。なお、さらに、彼にはもっと余生に成し遂げたい仕事が沢山あったことと思うが、本当に親友として亡くなったことが残念で堪らない。

何卒、これらの雑念を断ち切って、やすらかにお眠りください。ご冥福を祈っている。

次に田中忠次さんが各学会誌で発表された数々の論文の中で、特に印象的な項目をあげて故人を偲びたいと思う。

- 1 黒部植物友の会誌「黒檜」では毎号に『郷土の植物ものがたり』を掲載。第13号では、ツルクサを上げ、その形態や薬効、訪花の昆虫類を記載している。また、第30号掲載の『野の花写真散歩』では、ゲンノショウコ・ヘラオオバコ・サギゴケ等を上げ、それらの分布状態、薬効、訪花の状況等を記載している。
- 2 富山県生物学会誌では毎号に「昆虫類の訪花植物」について掲載。第27号では、『双翅類の訪花植物I』を記載し、ハナアブ科の101種が、60科316種の植物に訪花することを上げている。また、第28号では、『双翅類の訪花植物II』を記載し、ハナアブ科以外の41科196種が、38科150種の植物に訪花することを上げている。
- 3 富山県自然保護協会協報では毎号に、各種の昆虫記録を掲載している。

また、調査委員長として精力的に活躍された。